

◇蚊は世界一の殺人犯だって！！

大槻伸次

昨今、虱（しらみ）、蚤（のみ）、蠅などは激減したが、蚊は依然として大手を振って暴れまわっている。ものの本によると蚊は世界一の殺人犯（伝染病の媒介）といわれ、2位（人間）との差は圧倒的だそうです。平安時代の作家である清少納言（代表作に枕草子）は「につくきもの」と嫌い、あの平清盛はハマダラカが媒介するマラリヤにやられたという。しかし平安時代から1千余年が経過し科学技術が驚異的に進歩した現在でも、小さな蚊が原因で殺人され悩まされているのが現実なのである。

我が家では夏庭に出るときうっかり蚊除けスプレーを掛け忘れ、黒色の半袖や半ズボンなど皮膚を露出したまま出ようものならあつという間に蚊が突進してくる。

ときには何匹か解らぬほどたかり一気に刺されてしまう。刺されると目がまわるほど痒いのでたまらなく苦痛である。日本の夏を不快にしているのは猛暑と蒸し暑さだけでなく蚊の多いことも一因だろう。ちなみに、日本にいる蚊は約100種類ほどで犬や猫のみならず、カエルや蛇の血を吸う蚊もいるというから驚きである。

人間の血を吸いに来るのはヒトスジシマカ、アカイエカ、ヤマトヤブカ、チカイエカの4種類だそう。蚊に刺されるのも個人差があるらしくある研究者の研究結果によると、体温の高いヒト、血液型がO型⇒B型⇒AB型⇒A型の順で、O型はA型の2倍、B型は1.5倍だという。また、ビールなどの炭酸飲料を飲んだ人、肌が不潔な人、食べ過ぎ、黒色の着衣、スポーツをする人が刺され易いという。

アルコール飲料は体温を上昇させるからで、スポーツをする人は乳酸や尿酸、アンモニアの匂いを追うからだという。食品では熟成チーズがあげられるが、要因はチーズが含む細菌にあるとヴァーヘニンゲン大学（オランダ）の研究（足やくるぶしにの皮膚の上に居る細菌とよく似たもの）が特定したとある。

蚊の発生源は庭などの水溜りが原因と言われるので家の周りを厳重に点検をしているのだが、一向に蚊の発生が減る気配はない。そこで、考えられるのは我が家は鉢植え（盆栽擬きと草花・下水は農業用水路に流している）の植物を多く栽培しているため夏場の水遣りは一時でも欠かすことが出来ない。そこで、水遣りをちょこちょこやることにより周囲の湿度が高くなり蚊の生息に適した環境になっているのではないかと考えられる。

子どもの頃、蚊が発生する夏場は就寝時蚊取り線香を焚いたが、一晩中持たないの併せて蚊帳（かや）を吊った。そこで、毎日毎日繰り返される蚊帳吊りと取り外しは布団敷きとともに我々子ども達の仕事だった。生家で使用していた蚊帳は、緑色に染められた網戸の網のようなもので、吊った姿はテントのように箱型で、蚊帳の四隅とその中間に吊り手の金属の輪がついていた。その金具と家の中につるされた紐の先につけられた引っ掛け棒をくぐらせれば取り付け完了というものである。

外した蚊帳は、座敷の隅に丸めて置いた。蚊帳は、新品のうちはいいが長く使用していると破れて穴があいてくる。破れたのに気がつかないでいたり、出入りするときに蚊を十分に追い払って（子供は出入りが下手だった）から出入りをしないと蚊帳の中に蚊が入ってしまう。すると、夜中に体のあちこちを刺され、痒くて痒くて目が醒めてしまう。そこで、蚊帳の中に入った蚊を手でぱちぱちとたたいて蚊取りをした。

満腹に吸血した蚊は動きが鈍く手が赤くなるほどとれた。ところが、就寝中は蚊帳を吊るからまだまじだったが、問題は薄暗くなった夕方の中だった。

当時は（戦後）エアコンは勿論、扇風機もなかったので家の窓は解放状態で網戸など無く縁側の障子は開けっぱなしだったから夕方になると暗い家の中に蚊が入り込み、あつという間に刺され痒くて痒くてたまらなかった。もちろん蚊取り線香を焚いたが、広い室内と障子があけっ開きだったのであまり効果が無かった。

奈良時代の「万葉集」で、恋を詠んだ一首に「蚊火」とある。防蚊対策の記述とみられるが、松や杉、ヨモギを燃やして煙で燻し、蚊を追い払ったと思われる。

似たような事例として、生家でも蚊を寄せ付けない対策として家の中で燃し火をたいて家燻をした。すると今度は人間様のほうが煙ったくて涙がポロポロなんてことが日常的で、農家の生活風景だった。現在は建具がアルミサッシになり網戸が充実し扇風機やエアコンが完備しているので窓を開けっぱなしすることは皆無になり蚊の室内への侵入は激減した。

昔は蚊の対策として除虫菊が原料の蚊取り線香を使用した。1890年大日本除虫菊会社が発売したものであるという。この蚊取り線香という世界初の商品を発明したのは創業者の上山英一郎氏である。大学の恩師福沢諭吉の紹介で、米国人からキク科の花の種「除虫菊」を譲り受け栽培したそうだ。除虫菊はマーガレットのような可憐な花でキク科の多年草である。そのままでは効果はなく、白い花びらと黄色く見える子房などを乾燥させて殺虫成分を抽出するという。花が枯れた近くに虫の死骸がヒントになり効能が発見されたそうである。上山英一郎氏は線香業者と話すうちに、乾燥させた花の粉末を線香に練りこむアイデアが生まれたという。ところが、最初は仏様にあげる線香のように細く真っ直ぐ伸びる棒状だったそうである。ところが長さ 20 センチの棒状線香は燃焼時間が約 40 分と短かった。行きついたのが渦巻き型（蛇がとぐるを巻いている姿がヒントになったという説がある）で、安眠できる約 6 時間まで燃焼時間を伸ばせたという。20 世紀前半には、インドネシアやオーストラリア、米国など世界中に輸出したという。（大日本除虫菊(株)工場長の浅井洋氏談）

1920 年、煙より即効性のある除虫液エキスを使った液体殺虫剤がヒットする。薬販売の大下回春堂（現フマキラー）が「強力フマキラー液」を投入した。初期は液入りの瓶に口吹き用の霧吹きが付き、フッと吹いて使ったという。

戦後、安定して安く生産できる有効成分が開発され、昭和 63 年に登場したのは「マット型」だった。勤め先である三菱電機では、三菱電気蚊取り器（マット式の蚊取り器）として発売されたので早速導入してみたら、線香のように煙らないので使い心地は抜

群に良かった。そこで、電気蚊取り器のおかげで自分たちが所帯を持ったときは、すでに蚊帳を吊らなかったが、蚊帳を使用しなくなって久しい。初期の頃の蚊取りマットは薬品が強力だったのだろうか、家の中や就寝中蚊に悩まされることはほとんどなくなり快適な就寝が可能になった。

ときには蚊に刺されて痒いと思っていたら蚤に刺されたということもあった。蚤は襦袢や着物の縫い目などに潜んでいた。とった蚤を口に含んで歯で潰すとプチンという心地よい感触があった。母などは腰巻を右や左と捲って蚤取をしていたのを見たことがある。その後、アース製薬から「ノーマット」の液体の入ったカートリッジ式などが登場し一回セットすれば 12 時間、30 日効果が続き取り換え回数が減った。2000 年代に入りアウトドアでも使える「電池式」や火や電気も電池も使用しない「ワンプレッシュ式」など手軽に使える商品が普及した。

高温多湿の東南アジアやアフリカでは、池はもとより雨季になるとあちこちに水溜りが出来て蚊が大発生し「デング熱」や「マラリア」が大流行するそうである。

そこで、政府では蚊帳を吊って就寝するよう指導しているが、貧しい人々の多いアフリカでは 5 弗（ドル）する蚊帳を買うことが出来ず、マラリアやデング熱に感染する人が後を絶たないそうである。そこで、病院を訪れる人のほとんどは、マラリア患者とさえ言われている。

今年（2019 年）8 月 8 日のフィリピン保健相によると「デング熱」患者の増加に伴い、8 月 6 日デング熱の流行を宣言したそうである。フィリピンでのデング熱は 3~4 年周期で流行してきたそうであるが、今年は 1,092 人の死者を出した 2016 年を上回り過去最悪となる可能性があると言われている。

日本でも 2014 年海外渡航歴の無い方々のデング熱感染が報告され代々木公園（東京都渋谷区）が封鎖されるなど大きな問題となったことがある。

最近の日本の夏は温暖化の影響で高温多湿が常態化し、今まで以上の蚊の大量発生が予想され、代々木公園の例のようにデング熱感染（マラリアも例外ではない）も他人ごとではなく身近なものになると考えられる。

そこで、我々自身も東南アジア等の高温多湿の国々に旅行した折には細心の注意を払う必要があるだろう。また、身近なところでの蚊の発生源を減らすようなこまめな努力は欠かせないのである。（2019/8/20 記）

■につくきもの！！…清少納言 →→

